2006年、ウランバートルとソウルで開かれた２つのフォーラム

今岡良子

筆者は、このジャーナル第１号で、モンゴルにおける女性研究の動向を紹介した。その中で、これからの課題として、民主化によって解禁された伝統や習慣とジェンダーの間で生じる矛盾や少数民族の女性が抱える問題も研究対象とする必要性を述べた。この２つの問題について、2006年９月にウランバートルで開かれたフォーラムで報告があった。まず、そのフォーラムから紹介していきたいと思う。

（１）ウランバートルで開かれたフォーラム

2006年３月にウランバートルを訪問した時、９月にＤＶセンター主催のフォーラムが開催されると聞いた。会場にマスコミは入れず、女性だけで自由に語りあうことを目的にしているということで、ますます興味をもった。

ＤＶセンター（NCAV: National Center Against Violence）は、1995年にモンゴルで最初の女性のシェルターを作って以来、今日まで被害女性と向き合ってきたNGOである。今ではモンゴルの女性研究をリードする存在になっている。おそらくモンゴルで女性のNGOを紹介してほしいと言うと、一般の人でも、この名前をあげるだろう。2005年６月にソウルで開かれた世界女性大会のパネル Domestic Violence and Women's Movement in East Asia: Moving towards Regional Networking and StrategiesではＤＶセンターもパネルディスカッションに参加し、P.ナラントヤー（P.Narantuya）がモンゴルの現状を報告していた。以後、韓国のＮＧＯをはじめ国際的なネットワークを広げている。

2006年８月にウランバートル滞在中、DVセンター主催のフォーラムが９月５日に開かれ、そのテーマが、文化とＤＶのかかわりであると聞いた。これまでモンゴルでは常に市場経済移行後の貧困との関係からDVの問題を捉えてきたので、ますます興味をもった。筆者は、GCSD [1] のはからいで、特別に参加させてもらえることになった。

フォーラムの正式なテーマは、"Culture and Violence Against Women"で、伝統文化や習慣に潜む女性差別に関する報告が朝10時から夕方の６時まで続けられた。報告集は、ＤＶセンターから発行されるので、ここではごく簡単に紹介することにする。

第一部では、モンゴル国の多数を占めるハルハ族の知識人や活動家による報告であった。

- D.Enkhjargal (Director National Center Against Violence), 'Inter linkage Violence Against Women and Culture'
- T.Amgalan (Director Gender Center for Sustainable Development), 'Consequence on

1　GCSDは、NGOのGender Center for Sustainable Developmentの略である。GCSDの代表のT.アムガランは、DVセンターの代表のD.エンフジャルガルとともに女性を代表して意見を述べる機会が多く、組織としても共同行動をとることが多い。このフォーラムについての情報はアムガランから聞いたもので、筆者の参加も彼女によって実現した。

macro economic policy and women'

- S.Timendelger (Lecturer Department of Social Science Mongolian State University of Education), 'Discrimination against women and distortion in the labor market'
- D.Tungalag (Director Department of Social Management on Academy of Manahement), 'Consequence on social protection policy and women'
- B.Onon (information officer Gender Center for Sustainable Development), 'Development of Belief and requirement –Freedom of culture'
- J.Zanaa (Director Citizen's Alliance), 'New tendencies on culture'
- B.Togtokhbayar (Gender researcher, Kh,Enkhtuya director on Journalism Department Otgontenger University), 'One step forward, two steps back'

これらの報告の中で伝統と文化に関するものは、J.Zanaa と B.Togtokhbayar の報告であった。

J.Zanaa のべらんめえ口調の発言は圧巻だった。モンゴル帝国 800 周年の大小イベントが一年間続けられたが、ウランバートル市の区長までが封建領主の衣装を付け、チンギスハーン気取りで 9 人のお供を連れてイベントの開会式に登場するほどのはしゃぎぶり。そこでは女性は召使を演じる以外に出る幕はない。封建的な男女のあり方が再現され、繰り返される。「伝統」に興味をもつ若い人たちへの影響は大きい。女性は第二の存在であるという意識が浸透する。これでは、ますます女性の地位の低下につながっていく。男たちがはしゃいでいる「800 年」は、女性にとって何のプラスにもならない。このように語気を強めた。彼女の主張は、笑いと共感をもって受け止められていた。

B.Togtokhbayar も、軽快で、テンポのいい口調で、笑いを誘いながらの発言をした。彼女は、ことわざの中の女性蔑視、1990 年の民主化以降禁止を解かれたシャーマニズムや仏教の宗教儀礼における女性差別を取り上げた。民主化以降、男性の意識の中に存在していた差別も解禁され、市場経済への移行の過程で加熱するコマーシャリズムによって具象化、典型化されている。それが若い世代に強い影響を与えていることを指摘した。

1990 年以降、伝統を賛美し、宗教活動を復活させることが可能になり、むしろ、それらを批判の対照とすることを遠慮する傾向にあった。つまり、社会主義時代に行うことがタブーだったことが、民主化以降、解禁になると、批判することがタブーになったのである。2 人の報告は、私の知る限り、後者のタブーに挑む最初の報告であった。「800 年」に対する批判を公的な場で聞くのも初めてで、胸がすく思いがした。

第二部は、モンゴルの少数民族の女性の報告であった。モンゴルで少数民族の女性が自らジェンダーの問題を語るフォーラムはこれが初めてである。

フブスグル県からトゥバ族(トナカイ遊牧民)、スフバートル県からダリガンガ族、ドルノド県からブリヤート族、ホブド県からザハチン族、バヤンウルギー県からカザフ族の女性たちが、市場経済移行後に再生する伝統的な習慣の中に残る女性差別について語った。

カザフ族女性の報告をとりあげると次のようになる。人民革命前、イスラム教のカザフ族の女性は、「家事をする家畜」と見られ、わずか 13 歳で父、複数の妻をもつ高齢の夫に嫁がなければならず、夫が亡くなった後はその兄弟と結婚しなければならなかった。その状況は、革命後も 1930 年代まで続いた。その後、人民革命党の女性解放政策は、モンゴルの最も西に端に住むカザフ女性にも届くようになり、また、女性たち自身、教育を受け、意識改革をし、女性の地位向上に努力した結果、ハルハ族と同じように男女平等を勝ち取っていった。しかし、民主化後の伝統復活により、過去の悪しき習慣まで復活してしまった。このような少数民族の実態を理解し、共感し、ともに力をあわせて女性が抱える問題を解決していきましょう。このように呼びかけて締めくくった。

このようなカザフ族女性や他の少数民族の女性たちの発言に対し、ハルハ族の女性たちは、同じ女性として共感すると同時に、マイノリティに対する自分たちの無知を改めて確認し、話に聞き入っていた。

第三部は、ＤＶを取り巻く問題について報告が続いた。

- D.Dolgorsuren, Coordinator 'Gobi regional information and service center' on NCAV, 'Implementation on Law Combat Domestic Violence'
- D.Tsendayush,Lawyer and ADVocate, Center Human Right Development, 'Legal situation on human trafficking crime'
- L.Badamtsetseg, Coordinator Child Protection Program on NCAV, 'Legal regulation on rape crime'
- B.Altantsetseg, Director National Aids Foundation, 'Law against prostitution and prostitution'

特に、最後の報告は、貧困女性が性を売ることを止めることは難しい。しかし、エイズ予防のためには、性売買を許可制にすることも検討する必要だという主張であった。新聞でも、しばしば性売買を許可制にすべきだという意見が述べられる。これについては、特に反論もなく、質問もなかった。このフォーラムに参加している女性たちは、実際に性労働に携わる当事者ではないので、貧困から脱出する手段として、それも仕方がないという立場に立つ人もいるだろう。DVセンターは、2005年にDVの被害者が発言するシンポジウムを組織し、今年は少数民族女性の発言の場を作った。DVセンターなら、これまでの経験を活かして、性労働者が語る場を作ることができるだろう。この問題は、私たちの研究会の大きなテーマの1つでもあるので、モンゴルにおいても、当事者とも交流を深めながら、本格的な議論をする必要性を感じた。

第四部は、全国のＤＶセンターの支部[2]からの発言が続いた。どの支部の代表も、地元の警察やマスコミと協力しながら被害者の人権を守る難しさを語った。支部は、地域の人々が自主的に設立しているが、まだ支部のない県からも設立支援を呼びかけていた。

モンゴルのジェンダー研究は、DVセンターの活動を中心に、着実に進んでいる。また、DVセンターは、次に紹介するソウルのフォーラムから韓国に移住した女性も対象としていくのである。

（2）ソウルで開かれたフォーラム

2006年6月、モンゴルからの帰りにソウルに寄り、モンゴル人妻たちの会代表シュルンツェツェグを訪ね、韓国人男性と結婚したモンゴル人女性が抱える問題について話を聞いた。特に最近は、WEBサイトや結婚紹介所を通じて、年の離れた韓国人男性と結婚する10代のモンゴル人女性が増え、ウランバートルに仕送りするために愛のない生活や暴力に耐えているという。シュルンツェツェグ自身はソウルに働きに来て、職場で知り合った韓国人男性と恋愛結婚した人である。それでも、韓国の生活習慣に慣れず、家庭に溶け込めず、辛い時期を過ごした経験がある。貧困から脱出する手段として韓国人男性と結婚する女性の問題を自分の痛みとして話す表情が印象的であった。

翌日、シュルンツェツェグといっしょに移住女性人権センター（Women Migrants Humanrights Center

2　トゥブ県、同県バガノール地区、同県ナライハ地区、ダルハン＝オール県、セレンゲ県、同県シャリンゴル地区、ウブルハンガイ県、バヤンホンゴル県、ドルノド県、ドンドゴビ県。

in Korea）のチーフカウンセラーのCHOI, Jennyさんを訪ねた。モンゴルに限らず、アジアの様々な国で韓国のドラマが放送され、ソウルの豊かな生活と優しい韓国人男性に憧れてやってくる女性が増えている。結婚紹介のWEBサイトやソウルの結婚紹介所を通じてくる人も増え、国際結婚という形式の人身売買の被害者もいる。このセンターを訪ねるモンゴル人女性は少ない。これまで訪ねてきたのは2、3人であるが、いずれも韓国人の姑が生活になれないモンゴル人嫁を心配して連れてきたというケースだった。そのモンゴル人女性達は、韓国社会に定着したいというよりも、ここをステップにして渡米したいという意識が強かった、と淡々と語られた。

同センターは11月に偽装国際結婚による人身売買を防止するためのフォーラムを開催し、アジア各国からスピーカーを招待する準備をしていた。また、9月にウランバートルのＤＶセンターを訪ねた時、ＤＶセンターがこのフォーラムに報告者を送ることになったと聞いた。その帰り、ソウルのモンゴル人妻たちの会を訪ねた時、様々な相談が寄せられるようになったが、メンバー自身の仕事と生活に手一杯で、韓国の法律について学んだり、もめ事の仲裁に入ったりする余裕がなく、何もしてあげられないということだった。ソウルに来るＤＶセンターの代表を妻たちの会に紹介することは双方にとって重要と考え、筆者自身もこのフォーラムに参加することにした。

また、ウランバートルでモンゴル国立大学外国語文化学部の日本語学科を訪問した時、朝鮮語学科の主任ツェツェグが私を訪ねてきた。韓国人とモンゴル人の国際結婚について社会問題化しているので、自分は言語学が専門であるけれども、「上」から調査研究するように言われている、とのことだった。「上」とは誰かと聞かなかったけれども、モンゴルでは社会主義の時代から、「上」からの業務命令で新しいテーマに取り組むことがよくある。政府として本格的にこの問題に取り組もうとしているということだろう。

その後、ソウルのモンゴル人労働者支援センターのオットゴンがウランバートルに帰っていたので会って話をすると、国際結婚を仲介する業者のあり方の問題、結婚後のモンゴル女性の抱える問題がますます深刻になっているということであった。この春、ノムヒョン大統領がモンゴルを訪問し、今年だけでも9000人のモンゴル人を受け入れる話が進んでいる。残される家族、移住した家族、それぞれに問題を抱えている、ということであった。

この2人の話から、ノムヒョン大統領のモンゴル訪問以降、モンゴル側からも、韓国に移住したモンゴル人の問題を研究し、取り組むムードが高まってきた、ということが感じ取られた。

さて、11月21日から24日にかけてソウルの移住女性人権センターが開催したフォーラムは、"Asian Women Migrants' Strategy Discussion for Protection and Prevention of Human Trafficking in International Marriage" というテーマであった。討論の課題は次の6つで、1: 国際結婚の現状について、2: 国際結婚の増加による社会変化について、3: 外国人と結婚した女性の帰国後のサポートについて、4: 女性が国際結婚を選択する要因と背景について、国際結婚を奨励する政策について、5: 国際結婚に関する政策について、6: 国際結婚に関するＮＧＯの活動について、ということであった。

100人ぐらいの会場がほぼ満席で、2005年のソウルの女性大会で知り合ったKorea Women's HotlineのPak, In Heさん、Incheon Women's HotlineのMarieやDurebang（トゥレバン）のYu, Young Nimさんに再会できた。また、梨花女子大のジェンダーの専門家、フィリピン人移住者を支援している在韓ＮＧＯ、モンゴル人妻たちの会も参加していた。

スピーカーはベトナム、フィリピン、台湾、中国、モンゴル、日本の現状について報告した。予稿集"Asian Women Migrants' Strategy Discussion for Protection and Prevention of Human Trafficking in International Marriage" が出版されたので、詳細はそれを参照していただきたい。テーマをあげておくと、次のようになる。

- Han, Kuk Yom (Chief Director of women migrants human rights center),'The task and recent situation of international marriage trafficking -around Korea-'
- Cao Thi Hong Van (Vietnam Women's Union),'Report on the marriage of Vietnamese women with foreigners'
- Lee, Hae Eung, 'International Marriage in China-Current Situation and Problems'
- Sorormaa Chuluunbaatar (National Center Against Violence), 'The Human Trafficking in International Marriage'
- Florence May B.Cortina (Kanlungan Ceneter Foundation, INC.(Center for Migrant Workers),'Filipinas marrying Koreans: what's wrong with that?'
- Rossana Tapiru (Filipino Worker's Center),'Trafficking in International Marriages'
- Allison Lee (Hope Workers' Center),'Report of the Hope Workers' Center'

国際結婚については、日本でも事例は多いが、研究の蓄積は浅い。人身売買の被害者を出さないためにどうすればいいかという観点からこれからも国際的な共同研究や共同行動が展開していくだろうと思われる。

少し、気になった点を2つあげると、1つは、送り出し国からも、受け入れ国からも発せられた「国際結婚が貧困から脱出する手段になっている」という言葉である。確かに、貧しい国の貧しい地域から豊かな国に移住することで、その人は生活水準をあげることができる。豊かな国の貧しい農村に移住しても、出身地よりはましな生活を送れるかもしれない。初め、この言葉が、そういう国際結婚を受け入れる側から発せられた時、何とも言えない違和感を覚えた。それをまだ充分に分析できていないのであるが、こういうことではないかと思う。

1つの国なり、地域なりが豊かになる時、それはその地域の勤労者が勤勉に働いた成果である。しかし、実際には、それだけではない。資本は、国と国、地域と地域の間に存在する労働者の賃金、土地代、原料代などの格差を巧みに利用する。グローバル化は、豊かな国がより豊かになる構造を作り出す。少子高齢化と教育熱の高い韓国で、経済を持続的に発展させるには、韓国人よりも賃金の安い国からの移住労働者は欠かせない。また、生産した商品を売るためには、第三世界は重要な市場となる。韓国ドラマは、ソウルの豊かな消費生活を宣伝し、購買意欲を掻き立てていく。第三世界の労働者にとって、自分の国の賃金は低く、いつまでたってもそんな生活が実現しない。それなら、ソウルで働こう、と移住労働を選択する者が出てくる。3Kの仕事は男性向けなので、女性の場合、移住労働者になる機会が少なくなる。それなら、永久就職も兼ねて、国際結婚を選択する者が出てくる。この女性にとって国際結婚は、確かに、文化の違いや経済の格差、国境を乗り越えて、貧困から脱出する手段であろう。しかし、豊かな国の側の人間が、「国際結婚が貧困脱出の手段になっている」と言う時、貧しい国から搾取してより豊かになる自分たちの資本主義経済のあり方について、どう考えているのだろうか。それは問うことをせず、貧しい国から豊かさを求めてやってくる人のみを問題にするのだろうか。もしそうだとしたら、受け入れ国と送り出し国の女性は同じ立場に立って、移住女性の問題を語り合えるのだろうか。という疑問から違和感が生じたのだろうと思われる。

それから、送り出し国の第三世界の側から発せられた時にも、違和感を覚えた。これは、ウランバートルのフォーラムで、「エイズ予防のためには性売買を許可制にすることも検討する必要だ」という主張に対し、強い反論がなかった時に覚えた違和感に似ている。

また、2006年11月にこの研究会でベトナムを訪問し、アンザン省の女性同盟を訪ねた時、こんな話を聞いた。メコン川流域の住民の暮らしは貧しく、国外に出稼ぎに行く人が多い。女性同盟では、人身売買の被害者にならず、少しでもいい条件で働くことができるよう、語学や技術を教えて送り出している、という話であった。この時も、筆者は違和感を覚えた。

この国際結婚のフォーラムにおいても、ベトナムの女性同盟の代表が、女性同盟が結婚紹介所の役割を果たし、人身売買の被害者を出さないように努力しているという報告をした。ソウルのモンゴル人妻たちの会の代表バットゲレルは、DVセンターの代表と打ち合わせをしている時に、悪徳な業者を追放することはできないため、自分たちが紹介所の役割を担うべきだ、とくり返し述べていた。同じ送り出し国の人間として、貧困状況を熟知し、手段として国際結婚を選ばざるをえない女性の立場を理解し、貧困からよりよく脱出させるための手助けをしたいというのである。

しかし、メコンデルタは肥沃であり、そこで働く農民が食っていけないのは、農業を国民経済の中でどう位置づけるかという政治の問題である。モンゴルで高学歴な女性に就職口がないのは、コメコン下の国際分業で中小零細企業を育てることのできなかった歪な経済のあり方を、市場経済移行後も修正できていないという、やはり、政治の問題である。政治的矛盾を抜本的に改革する政治勢力（仲間づくり）を形成するのが「同盟」の役割だろうし、雇用の機会と労働条件と待遇、生活条件を高めていくのが運動であろうと思う。おそらく、そのような地道な活動は、報告されなかっただけで、行われているのだろう。しかし、それなしに、飢餓輸出を幇助しているとしたら、「人身売買の被害者を減らす」という言葉は、自分たちの組織の存在意義を説明しているにすぎない。

国際結婚を受け入れる側と送り出す側も、送り出す側の知識人と貧困者も、それぞれがグローバルな資本主義と向き合い、闘うということを通じて、お互いに連帯し、同じ目線で同じ問題を解決していけるのではないだろうか。

2006年度のゼミの学生三宅晶子さんが、仲介者を通じて国際結婚をしたモンゴル人女性のアンケートをとるため、３度ソウルに足を運んだ[3]。筆者と交流を重ねてきたいくつかの組織が喜んで協力するということであったが、実際には当事者に会うことすらできなかった。仲介所のWEBに自分の顔とプロフィールを掲載し、積極的に自己アピールすることで、韓国人男性のチョイスを待つ女性たちは、貧困から脱出するためなら何でもする、一見、たくましそうに見える。しかし、実際には、三宅さんの聞き取りによると、そのような結婚方法を選んだこと、結婚後の抑圧的な生活を恥じて、モンゴル人が集まる東大門のモンゴルタウンにすら現れないという。モンゴル人が毎週100人集まるというモンゴル人牧師の教会にも現れないという。この話をもとにすると、「貧しさから脱出する手段として国際結婚を選択をした」女性というレッテルも、安全な国際結婚を薦めることも、当事者女性を助けて、解放することにはならないのではないかと思えるのである。

このフォーラムには、日本から名古屋のFMC（フィリピン人移住者センター）のロサーナ・タピルさんが参加し、日本とフィリピンの間の国際結婚と人身売買の現状、ご自身の２人の子どもの内、１人は日本国籍を取得したが、１人は取得できず、係争中であることが報告された。裁判で闘うだけでなく、町内会の活動に参加したり、FMCで自文化を紹介し、子どもたちがよりよく生きていける環境を築いたりしていることも紹介された。ロサーナさんの報告は自分の経験にもとづく切実な問題で、途中、涙で言葉が途切れ、会場は水を打ったように静まりかえることがあった。しかし、子どもたちが、お母さんを応援するサインを送り、その可愛く、のびのびとした姿が会場を幸せな空気に変えた。ロサーナさんが、自分のさまざまな困難と闘いながらも、フィリピン人移住者のボランティア活動に打ち込むのは、この子どもたちの未来を拓くためであった。筆者が感じていた違和感も、彼女たちの存在によって解決されたような気がする。生まれ故郷に住んでいても、国外移住先であっても、当事者が仲間を作り、組織を運営し、社会的に問題を解決することが重要なのである。フォーラムに参加したＤＶセンターの代表も、ロサーナさんとの出会いは、非常に意

3　三宅晶子さんの卒業論文のテーマは「韓国人男性と国際結婚仲介業者を介して結婚したモンゴル人女性の韓国における現状」である。

義深いことだったと思われる。この報告の初めに、ウランバートルのフォーラムで、カザフ族女性が、革命前の一夫多妻制などの悪しき伝統が復活し、ともに力をあわせて女性が抱える問題を解決していこうと報告した、と述べた。「ともに力をあわせ」る主体の中に、裕福な家庭のカザフ族男性と結婚せざるをえない貧しい家庭のカザフ族女性も含まれてくるはずである。

2005年は韓国、北朝鮮とのかかわりからモンゴルを考える機会を得た。2006年はさらに南のベトナム、フィリピンとのかかわりから考える面白さを実感した。2007年はいよいよ中国、北朝鮮、モンゴルがこの研究会の研究対象となる。当事者の日々の努力に学び、広がるネットワークを大事にしていきたいと思う。